

長久保赤水 特集

江戸時代のベストセラーとして庶民が愛用

赤水図は旅行マップのさきがけ

佐川春久さんのほなし



わたしは、東京築地の生まれです。二十二歳のとき妻の出身地である高萩に...

わたしは、東京築地の生まれです。二十二歳のとき妻の出身地である高萩に...

ただ、いわきへ出張授業に行ったときに、大きな道、街道はきちんと整備されているけれども、ちょっと脇道に入ったら迷ってしまうという経験から、利便性を高めるために作ったのではないかと、言われています。

特集 長久保赤水

本分は儒学者で地図は趣味

に見て、その不思議さをメッセージとして伝えたかったのだと思う。なぜその現象が起るのか、結論を出す力はないけれども、書き残さずにはいられなかったのだと思います。そういう点で科学的な目も持っていました。

日本地図と言え、伊能忠敬のものがある。教科書に載っているうえに小説やテレビドラマ、映画になり、「日本地図をつくったのは伊能忠敬」ということがインプットされてしまっただけです。ただ伊能図は幕府のお金を使っただけの測量だったのも秘密とされ、幕府高官しか見ることができませんでした。だから浦賀にペリーが来たときに庶民が見ていたのは、赤水図でした。

江戸時代にこれだけの仕事をしたというのは、情報収集と編集能力が秀でていた、ということだと思えます。複数のものを読み、比較検討しながら地図を起しています。まず緯度と経度、さらに大きな河川を抑えて、そこに都市を置いていきます。ですから比較的正確です。作られた目的が違いためか、伊能図の場合、赤水図と比べると沿岸の記述はかなり正確だけれども中身が空欄という特徴があります。

赤水は地図の原図を描き、大阪の本屋さんが初版を出して、その十一年後に第二版が出ました。その後、五

版まで版を重ね、模倣版や海賊版がたくさん生まれました。現在、世界六カ国で四十四枚の赤水図が見つかっています。最初のものは、二十五両と高額です。白黒の版に職人さんが彩色したので、高くなってしまうようです。一両あれば、一年間お米を食べられた時代ですから、米を二十五年間食べられる、ということになります。吉田松陰も六十数年後に買っています。手紙に「三百八十文で買った」とあるので、おそらく模倣版か海賊版でしょう。

前は、赤水図について知りませんでした。

地図学の歴史を考えてみると、まず石川流宣図があり、長久保赤水図があり、伊能忠敬図ということになります。伊能図が一日でできたわけではなく、忠敬も「赤水図を持って測量していた」と日記に書いています。そういうことを正しく評価してほしいと思っています。

赤水は自ら「本分は儒学者で地図は趣味、余儀」と言っています。儒学者を英訳するとフィロソファー、哲学者です。書簡集を讀んでいくと、殿様に農政改革など十何本もの政策提言をしていて、とても幅広い仕事をしていたことがわかります。身分は低いかいけれども政治家でもあるわけです。

赤水は八十五歳で老衰のために亡くなったわけですが、酒は飲まず、煙草も吸わず、暇があれば書物を読んで勉強していた人だったようです。



長久保赤水が暮らしたまち

今号の特集は「長久保赤水」です。江戸中期に生きた人物なので、肖像画しか残っていません。そんなときには、書いたものを読み、生活していた場所に立って、時間を戻すしかありません。赤水が生まれ育った高萩市の赤浜、通っていた私塾があった下手綱、その近くには松岡城がありました。海辺から山へ。いまでは道路や線路ができて風景が大きく変わっていますが、海風の潮の香りや輝く緑、川のせせらぎはそのままなのだと思えます。(編集人 安竜昌弘)

編集室から

